

出生の地から広がる 顕彰と活動

テーマは「遠州公」(長浜市小堀町)



▲長浜市保健センター入り口の庭園と顕彰碑

坂田郡小堀村(現長浜市小堀町)で生まれた小堀遠州は、ここから飛躍していく。遠州を顕彰し、遠州をテーマにしたまちづくりに取り組む小堀町の動きを紹介しよう。

町なかに「小堀新介殿屋敷跡」の碑

小堀遠州は、天正7年(1579)に坂田郡小堀村に生まれた。羽柴秀吉が長浜城主だった時である。小

長であり、大橋さんは小堀遠州公顕彰会の事務局長を務めている。

「当時の小堀村の絵図に、小堀新介殿屋敷と書かれているでしょう」と、古山賢司さんが展示室に掲げられている絵図を指して、そう教えてくれた。

絵図は、慶長7年(1602)に描かれた検地絵図のレプリカである。小堀遠州公顕彰会の所蔵品だが、本物は長浜城歴史博物館に保管されているそうだ。慶長7年、江戸時代の初めに近江国でいっせいに検地が実施されており、これはその時のものだ。遠州の父、正次も幕府の官僚として、近江のほかの地域で検地をおこなったという。

「小堀新介殿屋敷跡」と彫られた石碑は、絵図に書かれた場所を比定して、顕彰会によって立てられた。絵図に描かれた屋敷を現在の区画に置いてみると、50m×100mくらいの広いエリアになる。

小堀家は総持寺に何度か寄進

絵図には、「小堀新介殿屋敷」の右手に、「馬ノ御馬々」と「下司村堀」という文字が記されている。絵図の通りに道をたどっていくと、絵図に示された「馬ノ御馬々」と「下司村堀」の所に、広い空き地と細長い池が現れる。

「地元では、今でも「馬駆けばんば」、「ばんば堀」と呼んでまして、小堀家の屋敷の堀と馬場だった所です」と古山さん。広い屋敷の周囲が、土塁と堀で囲まれていたことがわかる。

「下司村」とは、小堀村の隣にあった村の名前で、現在は宮司町の一部になっている。明治12年に、下司村と宮川村が合併して宮司村という名前に変わった。

堀村は、長浜城下から北国脇往還の春照宿へ行く谷汲道と、米原から小谷方面へ北上する小谷道が交わる要衝の地にあった。

現在も、小堀町は長浜駅前道路と国道8号という幹線がクロスする所にある。ロードサイドに大型商業施設が立地する繁華なエリアだ。周辺には、新しい住宅団地も形成されている。だが、古くからある小堀町の中に一歩足を踏み入れると、遠州が住んだ頃を彷彿とさせるような、小路と家並みに出会うことができる。

古い町のほぼ中央に町の公会堂が建っており、道を挟んだ向かい側の空き地の隅に、「小堀新介殿屋敷跡」と彫られた石碑が立っている。小堀新介とは遠州の父、小堀新介正次のことである。遠州が生まれた屋敷は、この場所にあったようだ。

小堀正次は浅井氏の家臣だったが、小谷落城の前に秀吉の側につき、秀吉の弟、秀長に従うようになる。天正13年(1585)、正次は主人の秀長とともに大和郡山に移る。したがって、遠州が小堀村に住んだのは6年間であるが、後年、彼は浅井郡に一万石ほどの領地を得、また近江国奉行にも就く。故郷との結びつきは、生涯絶えることがなかった。

展示室、茶室のある遠州会館建設

小堀町の氏神を祀る五所神社の境内に、遠州会館が建っている。会館は、遠州をテーマにした小堀町のまちづくりの拠点として、平成11年に建てられた。遠州にかかわる資料の展示室や茶室、集会所などが設けられている。地元のまちづくりの中心メンバーである古山賢司さん(75歳)と大橋順一さん(59歳)に、会館でお話を伺った。古山さんは、遠州流茶道長浜支部の会

宮司町には、総持寺という真言宗豊山派のお寺がある。絵図にも屋敷の東側に寺の名前が記されている。

「小堀家は総持寺に何度か寄進をしています。深い結びつきがあったんでしょうね」と古山さん。総持寺に残された古文書には、室町時代から戦国時代にわたって、たびたび小堀家の名前が登場するという。

総持寺にある庭園は、池泉回遊式の美しい庭で、県の名勝に指定されている。庭が造られたのが、遠州が作庭などで活躍した時代に重なり、遠州の庭だといわれる。

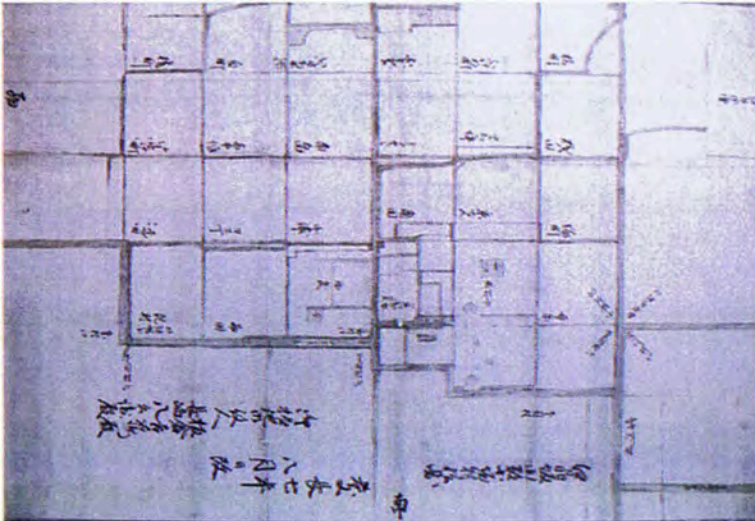
毎年3月第1日曜に遠州忌例祭

総持寺から西側の県道を北へ行ったところに長浜市保健センターがあり、その入り口に遠州の顕彰碑と庭園が造られている。昭和43年(1968)、明治百年記念の年に、地元のシンボルとして小堀遠州公顕彰会によって整備されたものだ。

顕彰会は、昭和34年(1959)に小堀町自治会の会員と市内外の賛同者などで設立された。毎年、遠州の命日である2月6日に近い日として、3月の第一日曜日に遠州忌の例祭が催されている。

当初は顕彰碑の前で例祭がおこなわれたが、天候不順で寒い時期であることから、公会堂で催されるようになった。

毎年、遠州茶道宗家の十三世家元小堀宗実氏が来られ、盛大な催しがおこなわれる。まず、近江孤蓬庵の小堀泰道住職の読経に始まり、遠州流茶道長浜支部の会員による献茶、地元愛好家の尺八演奏と献吟と続く。詩吟はびわこ岳心会の会員が、毎週遠州会館でおこなっている岳心流詩吟稽古の成果を披露する場でも



▲慶長7年の検地による絵図

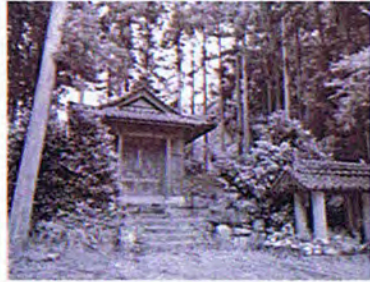


草木の中に確かな 小室陣屋の跡

小室に陣屋が置かれるのは遠州が没した翌年のこと。現在の長浜市小室町である。天明8年(1788)に改易になるまで、140年の間、小室藩はここで浅井の地を治めた。民家と森のなかに眠る、小室藩の繁栄の跡が浮かび上がってきた。



▲木立の中に「小室城址」の碑(陣屋跡の碑)



▲彌勒堂。この奥にかつて僧坊が広がっていた



▲平成2年に整備された城址



▲家臣・和田右仲屋敷跡の右仲池



▲陣屋の痕跡を示す石垣



▲屋敷内の鎮守だった稲荷神社



▲役行者を記る行者堂



▲蓮受寺の場所には馳走所があった



▲稲荷神社参道は昭和7年に整備された

夏の陣の4年後に備中から転封

かねて気になっていたことがある。小堀遠州と小室の関係である。遠州は、茶人として、建築家として各地の城や庭園、茶室などを手がけたマルチタレント、能吏だ。そんな華やかな世界に生きた遠州が、どうして小室という鄙(ひづ)の地の藩主になったのか。

大坂夏の陣(1615)から4年後、遠州は備中松山(現岡山県高梁市)から浅井郡へ転封になる。41歳の時だ。だが、実際に遠州が小室へやって来たことは、ほとんどなかった。伏見奉行として伏見に住むか、作事奉行として城づくり各地を飛び回っていたようだ。

小室に陣屋ができるのは、遠州が亡くなった翌年のことである。慶安元年(1648)、2代藩主の小堀正之が、政庁と屋敷を合わせた陣屋を小室に置いた。そんなことから、小室藩といわれるようになったのだ。

小室のある地域を田根という。浅井氏の本拠、小谷山の東にあり、三方を山で囲まれた美しい里だ。小室はその東の山際にある。国道365号から東へ入ると、瓜生、高畑、野田といった村から小室へと県道が延びている。

改易で陣屋や家臣屋敷が競売に

小室の東で、県道は二度大きくクランク状に曲がっている。最初の角を北へ曲がり、次に東へ曲がる。東へ折れずに、真つすぐに山

の中へ入っていくと、林道が川に沿って奥へ続く。小室陣屋は、林道の西側一帯に広がっていた。およそ100m四方の敷地で、陣屋の周囲を50軒ほどの家臣団屋敷が取り囲んでいた。これらの陣屋と家臣団屋敷を合わせた区域が小室城だ。

天明8年、6代目藩主の小堀政方の時に小室藩は改易になってしまう。お家取りつぶしである。5代目の小堀政峰が幕府の若年寄に就任したことから、出費がかさんだ。若年寄といえば老中に次ぐ要職だが、1万2千石の小藩では荷が重かった。そして6代目政方の時に、ついに藩財政が破綻。改易の憂き目を見ることになった。

改易の翌年、陣屋や家臣の屋敷などが競売にかけられ、すべての建物や庭などが解体されてしまった。しかし現地を詳しく見てみると、当時の痕跡が残っている。地元に住む郷土史家の川村戈十二(79歳)に、そんな史跡を案内していただいた。

小室の中央を東西に貫く県道の北側に、並行して、通称「裏道」と呼ばれる幅3mほどの小道がある。実は、この道が昔の「表通り」で、ここから北側一帯に小室城が広がっていた。

馳走所の跡に蓮受寺が移転

「小室城館図」(図1)と現在の小室町の地図(図2)を見比べてほしい。図2には、「表通り」に面して蓮受寺という真宗大谷派のお